

— 具体的なイメージを伝え、責任感とやりがいを持たせる —

株式会社角川大映スタジオ



事業概要 : スタジオレンタル
 従業員数 : 182名(令和4年3月現在)
 サポーター : 小島さん
 被支援者 : 20代(知的障害)
 勤続年数 : 4年11ヶ月(令和4年3月現在)
 業務内容 : 釘抜き作業、庶務業務

支援内容

取組み ➡ 業務の目的・必要性をわかりやすく伝える

効果 ➡ 責任感とやりがいを持って仕事に臨むようになった

障害のある方と初めて一緒に働くにあたり 知識を身につけるためサポーター事業に参加

株式会社角川大映スタジオは、調布市の広大な敷地に9つのスタジオを保有し、スタジオレンタル事業を柱に、プロダクション事業（映像制作）、ポストプロダクション事業（映像や音の編集）、美術製作事業（撮影セットの製作・塗装）を展開しています。

サポーターの小島さんは美術部に所属し、入社4年目のAさんのサポートをしています。小島さんは障害のある方と接することが初めてで、Aさん以外に障害のある社員もいなかったため、どのようにサポートをしたらよいかわからず、本人の能力を伸ばす関わり方ができるのか不安に感じていました。何か知識や接し方を学ぶ手段はないか模索していたところ、職場内障害者サポーター事業のホームページを見つけ、人事部からも後押しを受けて、養成講座に参加することを決めました。養成講座では、障害の概要や障害特性に合わせた指導方法等、小島さんにとって参考になる内容ばかりでした。

現場見学で作業の目的・必要性を伝え モチベーション向上から集中力の持続へ

Aさんは、スタジオ撮影で使った木材から釘を抜き、再利用するための準備をする業務を担当しています。しかし、当初は集中力が続かず作業が捗らないことが課題でした。そこで小島さんは、Aさんが担当する釘抜きの作業に興味を持ち、作業の目的や必要性を理解できるよう、一緒にスタジオに行き、釘を抜いた木材がどのように使われているのかを見せました。

スタジオの様子を見たAさんは、「釘抜きの作業を必要としている人がいる」「自分がやらなければ木材が無駄になってしまう」と感じ、自分が責任を持って行う必要があることがわかった、と小島さんに伝えてきました。

その後Aさんは釘抜き作業を集中して行うことができるようになりました。また、Aさんは1日の仕事が終わると翌日の作業スケジュールを確認し、「依頼が多く忙しくなりそうなので頑張ります」という発言をするようになり、小島さんはAさんのモチベーションや責任感が高まってきたように感じました。



<仕事風景>

また、Aさんはネットを見続けて夜更かしをしてしまい、体調を崩し勤怠が安定しないという課題もありました。小島さんはAさんの生活リズムを整える必要があると考え、その方法を模索していました。Aさんの課題を聞いた支援員は「使用している日誌に睡眠の善し悪しをチェックする欄を設けると良いのでは」とアドバイスをし、小島さんは日誌にチェック欄を追加することにしました。(図参照)以前は仕事に眠くなることも多かったAさんですが、チェック欄にマル(良)をつけなくてはという意識の変化から、自ら生活のリズムを整えるためにきちんとした睡眠を取るようになり、勤怠も安定してきました。



<作業日誌>

職場全体でAさんをチームの一員としてサポートする体制が整い、またAさん自身も業務のアドバイスや感謝の言葉などを多くかけてもらうようになり、さらに役に立ちたい気持ちが大きくなりました。

	3月1日	3月2日	3月3日	3月4日
90Lゴミ袋 1箱				
70Lゴミ袋 1箱				
45Lゴミ袋 1箱				
90Lゴミ袋 1箱				



<備品チェック表・備品置き場>

部署メンバー作成の写真付き備品チェック表で 新たな業務にチャレンジ

コロナ禍で撮影が延期や中止となり、Aさんの釘抜き作業が少ない日が続いたため、新たに備品受発注の業務を担当させ、Aさんの所属する美術部の他のメンバーに業務指示をしてもらうことにしました。当初美術部のメンバーは、Aさんにどう指示や声かけをしたらよいのか、何が苦手なのかが分からず躊躇していました。そのため、Aさんの作業量が多い時や小島さんの不在時にも美術部のメンバーがフォローできるよう、まずAさんの得意・不得意なことや伝わりやすい指示の仕方を具体的に共有しました。すると、美術部のメンバーは、Aさんが備品受発注の業務を習得できるよう写真付きの備品チェック表を作成し、Aさんは備品チェック表を見て、美術部のメンバーと声を掛け合いながら進めることができるようになりました。

その他、Aさんは撮影に使用する貸出備品の清掃業務も担当するようになり、その備品を貸し出した時に、他部署の社員から感謝の言葉を掛けてもらうこともありました。Aさんは他部署のメンバーと関わる機会も増えて、徐々に良い関係を築くことができるようになりました。

必要とされていること、できていることを 実感してもらえる言葉かけ

小島さんはAさんの更なるスキルアップを見据えて、イメージすることがあまり得意でないAさんに対し、Aさんの仕事がどのように役立っているか、何のために行っているかを日々言語化して伝えるようにしました。例えばお客様の入館証を作成する業務をお願いしたときには、社内で入館証を身につけている方がいたら「Aさんが作成してくれた入館証ですよ」と伝えました。その結果、Aさんは日々の仕事に意味を感じ、やりがいを持って取り組むようになりました。

サポーター事業に参加する前と比べ、Aさんは前向きに業務に取り組むようになり、表情も明るくなりました。小島さんは今後、Aさんが長く活躍できるよう、新たな課題が生じた時はAさんの様子を観察し話し合い、一緒に解決していきたいと考えています。

小島さん「こまめなコミュニケーションと周囲との情報共有を大事にしています」

サポートをする上で大切にしていることは、コミュニケーションです。距離を取らず積極的に声をかけ、質問されたことは小さなことでも必ず答えるようにしています。そして、Aさんが「何かあったら相談していいんだ」という安心感が持てるよう、もし不明点があった場合はAさんと一緒に担当者に質問するようにしています。これにより、Aさんとの信頼関係を築き、Aさんが気持ちよく働いていくことができると感じています。

また、1人で抱え込まないことも意識しています。月

1回の訪問支援時に、1ヶ月に起こった出来事や困っていることを支援員の方に話すことで、問題点を整理し、アドバイスをいただくこともできて、とてもありがたく感じていました。また、職場のメンバー達にもAさんのことをオープンに話して、何かあれば情報共有をしたり、ご家族とも連絡を取り合ったりしています。これからもAさんに責任感とやりがいを持って明るく働いてもらえるよう、皆で協力し合いながら、支え合える雰囲気を作りたいと思います。